

建築フルブライト・シンポジウム開く

原田敬美 (建築フルブライト世話人)

「留学体験がどのような建築、都市、国家を日本につくってきたか」というテーマのシンポジウムを主なプログラムとし、建築フルブライト(都市計画、土木分野含む)第3回同窓会が昨年11月9日夕刻、都内のレストラン「シーボニア」で開催された。担当幹事は小栗氏(73年ペンシルバニア大)と堀内氏(81年イェール大)であった。

同窓生が21名、シェパード日米教育委員会事務局局長夫妻、同事務局の伊藤、岩田の両氏をはじめ招待者8名、フルブライト以外で上記のテーマに関心を持つ方15名、合計44名が参加した。

開会に先立ち、世話人の私から「今回のシンポジウムの意義は、フルブライト制度発足50周年記念事業の一環であり、フルブライト留学制度が何であったか改めて問い直す機会にしたい」と主旨説明をさせていただいた。

午後5時から6時半までの90分間、小栗氏が進行役、米国設計事務所日本代表キャロル・マンク女史(ゲスト)、グラフィックデザイナー片山氏(前ハーバード大学美術教授、ゲスト)、ジャーナリスト竹内女史(フルブライター)、建築家高橋志保彦氏(64年ハーバード大学)の4名がパネリストとして初めに発言した。

マンク女史は、「8年間東京に住んで、初めはおもしろい街と感じたが、時間が経つにつれ、東京は街の特色やどう住むかのポリシーが欠如している」と問題指摘。「有名企業や有名建築家が美しい街づくりのため指導力を発揮すべき」と提案。

片山氏は「ボストンから東京を訪れ感じるのは、たとえば新宿副都心都市計画の全体像が見えないことと、東京には周りの人のことを考える人がいなさすぎる」と問題指摘。

竹内女史「アメリカの住宅地は緑が美しいが、自宅のある千駄ヶ谷周辺の住宅地は土地政策の貧困から風情が消失した」と問題指摘。

高橋氏は「西欧では建築の歴史的な連続性があるが、日本では明治に突然西欧化され木に竹をつぐように西欧建築が導入されたが、日本人建築家は西欧型現代建築の設計をうまくこなせてない」と問題指摘。

こうした指摘に対して、フロアーからも積極的な発言があった。「日本汚い、外国美しい式の議論は違う。建築家や都市計画家の責任というより制度、文化に問題の根がある。」「日本の大都市は急ごしらえで汚い。ゆっくり時間をかけてつくった都市は美しい。」「香港から看板を無くしたら香港でなくなるという考えも大切。」「西欧は表層の物的秩序が、日本は人のアクティビティが要素となっている。」

フルブライト制度で留学の機会を頂いた建築家も都市計画家は少なくとも、世界の中で日本を理解し、異なる視点で建築設計や都市計画を試みたのは事実。ただし、日米の建築・都市の土壌があまりにも違いすぎたというのも実感である。

■Keimi Harada/1974年大学院、ライス大学/建築家、SEC計画事務所代表

■短信 松原亘子さんが初の女性事務次官に 東京同窓会副会長の松原亘子さんが8月1日付で、労働省事務次官に就任しました。女性の事務次官は中央省庁では初めてです。男女雇用機会均等法が施行された1986年、担当課長として活躍し、今回、同法改正案が成立した直後に、労政局長から事務次官に登用されました。

■訂正 前号7ページの写真説明中、三井優子さんであるのは三井愛子さんの誤りでした。お詫びして訂正します。

高度成長は大昔のことになりましたが、わが家はいまだに、たまの休日を除いては「父親不在」の家庭です。けっして好きでそうしているわけではありません。たまには早く帰宅して、坊主とキャッチボールでもして、汗を流したらビール(もちろん息子はジュースですが)をゴクッ、という椎名誠的夕暮れを過ごしたいとは思いますが……。女性問題は、実は、すぐれて男性問題でもあるんですね。(西)

編集後記

1997年度総会のパネルディスカッション(Page3参照)で、会場の男性からこんな発言がありました。「男は会社、女は家庭、という高度成長期の男女のあり方は子どもの教育を歪めた。男も女もともに子どもと触れ合うべきです」。そのとおりなんです。

ガリオア・フルブライト東京同窓会 〒102 東京都千代田区二番町11-10 TEL:03-3221-1841 FAX:03-3238-0758



TOKYO GARIOA/FULBRIGHT ALUMNI ASSOCIATION

ガリオア・フルブライト東京同窓会

NEWSLETTER

No.10

DECEMBER 1997

3女性に第2回フルブライト賞

白鳥正喜

(東京同窓会会長代行)



行天豊雄・東京同窓会会長から記念品を受ける第2回フルブライト賞受賞者。

ガリオア・フルブライト東京同窓会の1997年度総会は、4月14日、東京・新宿のヒルトンホテルで開催された。今回の総会では、フルブライト・プログラム40周年を記念して制定されたフルブライト賞の第2回授賞式もあわせて行われ、「フルブライト精神」を受け継ぐ活動を続ける女性3氏に授与された。また、新たな試みとして、「21世紀の男女共生社会を目指して—フルブライターたちの役割」と題したパネルディスカッションも行われ、会場からの発言も相次いだ。

フルブライト賞は、職業あるいは個人活動を通じて「フルブライト精神」をもっとも発揮した個人を表彰するものです。「フルブライト精神」とは何かの定義はありません。故フルブライト氏の言葉を借りれば「主義主張は違っても、喜びや悲しみ、また冷酷さや親切といった共通の感情を分かち合うことに貢献」することです。フルブライト賞はフルブライト計画40周年を記念して1992年に設けられ、同年5名の方々に贈られました。本年は第2回ですが、広く各地域同窓会の皆様の御推薦に基づき、日米交流、国際交流の促進のために長年草の根レベルで御活躍されている次の3名の方が選出されました。

長門芳子様：長門さんは1982年に宇都宮市にお住まいの主婦の方々に呼びかけて「いっくら国際文化交流会」(正会員80名、賛助会員110名)のボランティア団体を設立され、その会長を勤められておられます。同交流会は、外務省、県、市等の公的機関や、フルブライト・プログラム等を通じて来日する外国人のホームステイ(対象76カ国、年間150人)、地域社会への情報提供のための広報・出版事業、外国人の日本語スピーチ・コンテストや国際井戸端会議の主催等広範囲な活動を行っておられます。

長門さんはこうした活動を評価され、1991年には外務大臣個人表彰を受けられたのを始め、1992

年にはサントリー文化財団より「サントリー地域文化賞」、1993年には国際ソロプチミスト宇都宮より「女性ボランティア賞」を受賞されておられます。

太田淳子様：太田さんは長年アメリカン・フルブライターの出迎えを中心とするボランティア活動のリーダーをしておられます。アメリカン・フルブライターが来日して最初に接するJapanese hospitalityは太田さん

をリーダーとするボランティアの方々の御親切です。太田さんを知らないアメリカン・フルブライターは居ないと言って良いでしょう。

太田さんはアメリカン・フルブライターだけでなく、その他のアメリカ人やオランダ人、中国人、ドイツ人、マレーシア人、ギリシャ人等の方々をホームステイに招き、日本料理や日本文化を教えたりして相互交流に努めておられます。

加舎逸子様：加舎さんは外交官夫人として2度のワシントン生活を通じ7年間ワシントン日本語学校校長を勤める等、日米交流の促進に大きな貢献をされました。ご帰国後はかねてよりのご趣味である俳句活動を活発に行い、俳人として著名です。加えて日米俳句交流の促進に努力され、「国際俳句交流会」(有馬朗人会長)主催の「日米合同俳句大会」



第2回フルブライト賞を受賞した3氏。左から長門芳子、太田淳子、加舎逸子の各氏。

のために事務方の中心となって働いておられます。同大会は前回は1995年5月にシカゴで開催されたが、今回、国際交流基金との共催、米国大使館、文部省、朝日新聞社等の後援の下に4月18～24日東京において開催されました。

以上の他、大阪の志野義治さんをお選びしましたが、本人が固くご辞退されました。同氏は(財)日米教育交流振興財団が現在管理・運営している「志野基金」設立のために1億円余りの拠出をされた他、環境問題等の草の根レベルの活動も積極的に行っておられます。

なお、選考委員は安成子さんと私(白鳥正喜)が勤めました。

■Shiratori Masaki/Columbia University, 1964-66/海外経済協力基金理事

「男女共生」をめぐって活発な意見交換

西岡一正 (パブリシティ委員長)

総会にともなう記念イベントとして、従来は同窓生による講演が行われていましたが、1997年度総会では、新しい試みとしてパネルディスカッションが行われました。「出席者からもさまざまな意見を聞く機会としたい」(早川与志子アラムナイミートイング委員長)という意向からでした。

テーマは「21世紀の男女共生社会を目指して—フルブライターたちの役割」。パネラーは原ひろ子・お茶の水女子大学教授(ジェンダー研究)と行天豊雄・東京同窓会会長がつとめ、加藤哲郎・一橋大学教授(政治学)と早川委員長がコーディネーターを担当しました。

最初に基調スピーチに立った原さんはまず、国際会議などで出会った日本の男性の姿を「国内ではそれぞれの世界でリーダーシップを発揮している、著名な人でも『男女共生』問題になると議論についていけません。若い世代は個人的には理解があっても、日本を代表する立場上、個人的な意見を言えないんです」と、ユーモアを交えて紹介しました。

もう1人のパネラーの行天さんは、官界、実業界で40年間仕事をしてきた経験から「アメリカはいうまでもなく、アジアの国々と比べても、日本では女性の社会的プレゼンスが低すぎると実感しています」と発言。女性の社会進出を促すために①女性自身の努力 ②「女性コンプレックスの塊」になっている男性側の意識改革 ③会社などの組織変革 ④社会全体の対応—が必要だと語りました。

21世紀にむけて、日本社会の重要な問題として、原さんは「少子化」と、それとリンクした「高齢化」を挙げました。その背景として「国連の統計では、健康や教育、平均寿命などの指標では日本は世界3位ですが、女性議員の数など(女性の社会進出の度合いを示す指標)では世界37位に後退してしまう」現実を指摘し、そのような状況のなかで若い女性が子どもを生まなくなる「少子化」現象を「女のストライキ」ととらえる見方を紹介しました。

コーディネーターからも、「男女雇用機会均等法

ができてようやく女性の社会進出が進み始めたが、いざ不況となると女性の就職が難しくなります。性別に関係なく、優秀な人物を採用するという原則が守られていません」との指摘がありました。これをうけて、行天さんから「日本の将来を考えても、もっと女性に貢献してもらわなければなりません。そのためには、ある時期には(アフター

マティブアクションのような)強制的措置が必要になるのではないのでしょうか」という発言がありました。

後半には会場からも発言が相次ぎました。

アメリカに留学するまでは「女子大生亡国論をふいていた」男性は、「アメリカで考えが180度変わり、女性も男性と同じように社

会に進出すべきだ、と考えるようになりました」とフルブライト留学の影響の大きさを強調しました。

外資系企業で人事・総務を担当する男性は「外資系企業では男女平等が社風となっていて、優秀な人材なら男女を問わない。(女性の雇用に消極的な)日本の企業はやがて外資系に負けますよ」と指摘しました。

しかし、実際に外資系企業に18年間勤務して退職したばかりという女性は、自らを振り返って「燃え尽きるのではないかという思いでした」と表現。「子どもを育て、両親の世話をしながら管理職まで務めました。私以外に管理職を務めた女性は、独身か、結婚していても子どもはいない。子どもがいても母親が見ていてくれるという(条件に恵まれた)人ばかりでした。男性には言葉だけでなく、実際に手を出して(働く女性を)助けてあげてほしい」と語り、会場に共感と感銘の輪が広がりました。

■Kazumasa Nishioka/1989年ジャーナリスト、University of California, Los Angeles /朝日新聞社勤務



パネルディスカッションで基調講演をする原ひろ子お茶の水女子大学教授(左)。行天豊雄・東京同窓会会長もパネラーとして参加した。



質疑応答の時間になると参加者からの熱心な発言が相次いだ。

1997 FULBRIGHT FOUNDATION GRANTEE LIST		
NAME	DISCIPLINE/TOPIC	GRANT
GRADUATE RESEARCH FELLOWS - Graduate Students (3)		
Mr. ELWYN, Todd	Philosophy	Fuji Bank
Mr. WALLACE, Rodney	Economic Theory	Industrial Bank of Japan
Mr. STEWART, Daniel	Japanese History	Shino Fund
FULBRIGHT FELLOWS - Recent B.A.s (10)		
Mr. BAILEY, Steven	Business Management & Administration	Japan Economic Foundation
Ms. HOCKENSMITH, Amanda	Art History	Japan Economic Foundation
Ms. HOOD, Tiffany	Japanese History	Japan Economic Foundation
Mr. BIKLEN, Noah	Architectural History	Mitsubishi Group
Mr. SELTZ, Daniel	Area Studies	YKK
Mr. BOUDREAU, Christopher	Computer & Information Science	Toyota
Ms. OKAJIMA, Anjela	Ceramic	Kyusyu Alumni Fund
Mr. ALLEN, Matthew	Physics, General	Osaka Alumni Fund
Ms. SCHULTZ, Kristen	Women's Studies	General Alumni Fund
Ms. YOUNG, Allyson	Japanese History	General Alumni Fund
GRADUATE STUDENTS - Japanese (2)		
Ms. YAMADA, Kyoko	Business Administration	Cargill
Ms. ISHIYAMA, Noriko	American Studies	YKK

ホスピタリティ委員会の活動について

太田隆次 (ホスピタリティ委員会委員長)

ホスピタリティ委員会は同窓会会員のご協力を得ながらいろいろの活動をしています。出迎えサービスとアメリカ人ニューグランティアー歓迎会について近況を報告させていただきます。

1989年に始めた「出迎えサービス」は、ご多忙の中、ボランティアと家族の方々のおかげで、1996年9月16日現在で述べ111名のフルブライトグランティアーを成田あるいは東京シティエアーミナルで出迎えて、第1日目の宿泊先に無事届けることができました。

1996年度も、いつものことながらボランティアの方々とお互いに都合のつく日時を連絡し合っ、以前に大日本インキ化学に川村前社長のご好意で作って頂いた出迎え用の「GARIO A FULBRIGHT」のロゴ鮮やかなプラカードを掲げて、年齢も専門もさまざまの方を出迎えました。

出迎えてあげたフルブライトグランティアーから礼状とその後の消息報告を頂くことがありますが、最近、礼状に添えて手作りの限定版の自作の詩集を下さった方があって本当に感激しました。

前号でお願いしましたところ、ボランティアの数も増えました。嬉しい限りです。

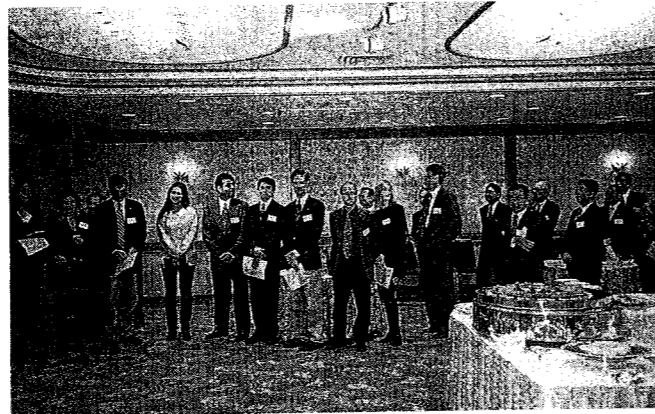
一方、恒例のアメリカ人グランティアーの歓迎会が、1996年度は11月26日にグランティアーと家族、冠企業、日米教育委員会、同窓会会員など約120人が集まって、前回と同じ赤坂東急ホテルで開かれました。

メインゲストはもちろんアメリカ人グランティアーですが、毎度のことながら同窓会会員同士の久しぶりの歓談の輪がこちらこちらにできていて、ビールやワインのグラスを傾けながらあの頃の思い出話に花を咲かせ盛会でした。

次回も同窓生の皆様に開催のご案内をお送りしますので、なるべく多くの方、特に若い方たちにご出席頂ければまた話も弾むことでしょう。

宴たけなわの時、アメリカングランティアーから、それぞれ留学目的と自己紹介をして頂きましたが、いずれおとらぬ流暢な日本語でユーモアを交えての自己紹介に、出席している方たちからやんやの拍手喝采を浴びていました。

■Ryuji Ohta / University of Virginia, University of Wisconsin, 1967-69 / 国際人事研究所所長



1996年度のアメリカングランティアー歓迎会のひとこま。

アメリカングランティアーの宇都宮旅行と歌舞伎鑑賞教室

三上紀史 (文化活動小委員会委員長)

フルブライト同窓会のホスピタリティ委員会できたのは、1988年の秋の頃でした。それから9年が経過しようとしています。ホスピタリティ委員会は、アメリカングランティアーの皆様への日本滞在を、より実りあるものにするためのお手伝いをするという趣旨でつくられました。

ホスピタリティ委員会の文化活動小委員会は、アメリカングランティアーの皆様いろいろなかたちで日本文化を紹介する活動をつづけてきました。しかし、現在のところ、当小委員会は、組織として効率よく機能しているとはいえません。全面的に活動を見直す時期にきていると思われます。

当小委員会は昨年、例年のように、アメリカングランティアーのための「歌舞伎鑑賞教室」と「宇都宮旅行」のお手伝いをしました。

「歌舞伎鑑賞教室」は、モービル石油の広報部のご厚意で1994年からはじまりました。毎年、国立劇場で催される「歌舞伎鑑賞教室」の入場券を、モービル石油広報部からいただき、アメリカングランティアーの参加希望者に配布しています。昨年は6月2日に3回目の「教室」が開かれ、アメリカングランティアーとその家族12名、同窓会会員とその家族5名が参加いたしました。出し物は「魚屋宗五郎」(中村橋之助主演)でした。歌舞伎の上演が終わった後、国立劇場内の一室で、モービル石油主催の昼食会と、歌舞伎についてのセミナーが開かれました。講師は前年と同様、マーク・オオシマ氏でした。セミナーでは、江戸時代の庶民の生活や、歌舞伎の上演様式などについて熱心な質疑応答が行われました。

一方、「宇都宮旅行」は、昨年11月24日から26日まで2泊3日の日程で行われました。今回で7回目になりますが、例年通り、宇都宮市のボランティア団体「いっくら国際文化交流会」の皆様、ホームステイの受け入れと、栃木県内の力の案内をしていただきました。参加者は、アメリカングランティアーとその家族21名と、同窓会員1名でした。第1日は栃木県立博物館の見学、第2日は日光周辺の観光、第3日は高根沢小学校とキリンビールの工場を訪問しました。県立博物館では稲作

の特別展が開かれていて、日本の稲作の歴史や特徴などについての講義も行われ、グランティアーの皆様のお興味がそそったようでした。

以上の2つの行事は、グランティアーの皆様にご好評を博しているものですが、「宇都宮旅行」は「いっくら会」の皆様にご費用の面で負担をかけているようです。今後検討すべき問題だと思われます。

■Tadashi Mikami / 1986年Asian Scholar-in Residence, Coker College(South Carolina) / 大東文化大学文学部英米文学科教授

1997年度総会での各種報告

1996/1997年度役員

- 会長：行天豊雄
- 副会長：白鳥正喜(会長代行) 有馬朗人 小西輝明 松原亘子 高澤廣茂 安成子 田中哲男
- Foundation Liaison委員：堀江昭 / 担当副会長：小西輝明
- Alumni Meetings委員長：早川与志子 副委員長：加藤哲郎 / 担当副会長：安成子
- Hospitality委員長：太田隆次 副委員長：三上紀史 / 担当副会長：高澤廣茂
- Publicity委員長：西岡一正 / 担当副会長：行天豊雄
- Administration事務局：加藤弓弦 / 担当副会長：白鳥正喜
- 監査役：堀憲明

1996年度会務報告

- 96.04.04 1996年度総会及び懇親会。講演者小田実氏。出席者134名。
- 96.05.20 アメリカン・フルブライターのために最高裁判所及び国会の見学会。参加者27名。
- 96.06.04 アメリカン・フルブライターのために東京国立大劇場にて歌舞伎鑑賞。出席者12名。
- 96.06.06-10 アメリカン・フルブライターを成田空港に出迎え。
- 96.10.21 第21回日米交流チャリティ・ゴルフ大会。参加者148名。募金額7,335,000円。
- 96.11.24 アメリカン・フルブライターのために宇都宮ツアー(日光東照宮、益子焼きなど)2泊3日。参加者21名。
- 96.11.26 アメリカン・フルブライターの歓迎会。出席者116名。
- 96.12 Newsletter No.9を発行。
- 97.03.07 フルブライト賞受賞者審査。
- 97.03.12 東京同窓会役員会。

1996年度決算

収入の部		金額(単位:円)	
会費	4,956,000	地代家賃	288,685
寄付金	46,000	会合費	-119,161
受取利息	44,796	倉庫料	124,853
募金手数料	1,787,535	事務用品費	140,536
PC賃貸料	240,000	給料手当	3,271,641
当期収入合計(A)	7,074,331	奨学生費	248,949
前期繰越	11,976,415	支払手数料	7,968
収入合計(B)	19,050,746	図書購入費	7,400
		会議費	56,900
支出の部			
旅費交通費	215,078	雑費	103,752
通信費	1,231,905	予備費	0
印刷製本費	554,466		
交際費	0	当期支出合計(C)	6,916,478
什器備品	755,192	当期収支差額(A)-(C)	157,853
消耗品費	0	次期繰越(B)-(C)	12,134,268
PC備品	28,314		

監査の結果、いずれも適法かつ正確であることを認めます。
1997年7月10日 監査役 堀憲明

1996年度募金データ

企業名等	金額(単位:千円)		
カーギル	5,000	ソニー	2,500
富士銀行(見込)	4,000	J P モルガン	1,000
日本興業銀行	4,000	大阪同窓会	10,000
J E F	12,800	九州同窓会	20,000
三菱グループ	5,000	東京チャリティゴルフ	7,335
トヨタ自動車	5,000	個人寄付金	530
Y K K	10,000	合計	82,165